

アトモスフィア

生化学会を活性化するために

吉村 昭彦*

現在私の主な研究分野は分子免疫学であり純粋な生化学から少し遠ざかっている。しかし元々はサイトカインやそのシグナル伝達機構が専門であり、基本は生化学者であると思っている。昔は酵素の精製もやっていたので実はカラム操作は得意である。生化学会からは奨励賞と柿内三郎賞をいただき、平成20年から2年間常務理事も務めさせていただいたので人一倍生化学会には愛着を感じているつもりである。しかしこの頃は学会としては生化学会の存在感が薄いような印象を持っている。分子生物学会との合同大会と比べると単独開催の場合に大会に出席しても盛り上がり欠けるような気がしてならない。生化学会には地方例会やこの生化学誌のように他の学会にないユニークで優れた活動が脈々と受け継がれている。しかしその認知度は学会外ではさほど高くなく、やはり大会の盛り上がりとその学会の勢いのバロメーターのような気がする。

平成21年1月に将来計画検討委員会委員長として10名程の中堅の会員を集めてどうすれば生化学会を活性化できるか、について話し合った。いくつかの提言のなかで会長や役員改選の制度的改革はすでに成し遂げられている。しかしそのときは大会については会費を安くするとか分子生物学会との合同大会を積極的に提案する、といった安直な提言しかできなかった。大会は各年の実行委員会に任せられておりそれぞれの理念で行われているからだ。しかしこれからは単独開催が続くのであればもっと何か柱になるものが欲しい。例えば以前西田栄介先生が会頭をされた時は“日本語で学会デビュー”というスローガンを掲げられて若手、特に大学院生の口頭発表を重視されたことがあった。このような大会の理念を継続することは重要なのではないかな。もちろん英語や最先端の話も大切なのでそれらをどう取り込むかも議論して欲しい。例えば日本免疫学会では大会時に常にアンケートをとっており、また大会の総括を学術集会委員会で次の年度に活かす努力をしている。生化学会の大会についても会長や実行委員会まかせではなくそれぞれの大会の経験を次に行かす工夫をしてはどうだろうか？

大会以外でよく目につく活動は話題限定のシンポジウムである。分子生物学会には春期大会がありトピックスを絞って、しかも会場は比較的的地方で深い議論がなされている。生化学と同様に、分子生物学も学問分野そのものであると同時に広範な生物医学を支える方法論でもあり、ある意味雑多なトピックスの集合体である。大会はどうしても広範囲にならざるを得ないので小シンポである分野を集中して議論しようと思われている。また免疫学会では理化学研究所との合同シンポとして英語で、海外から一流の研究者を多数招いて2日間の専門性の高い講演会を毎年行っている。大会では一般会員の発表を中心にし、別の小規模の会で英語を基本言語としてトピックスを限定しより先端的で深い議論を行おうというものである。またサマースクールも大規模なものが毎年開催されており若手の育成や勧誘に努めている。

生化学会はどうかということ、じつはバイオフィロンティアシンポジウムというのがあって当初は生化学会春季大会として開催されていた。平成13年以降は国際シンポジウムとして毎年特定分野を選択して公募で行われている。しかし学会から多額の費用を拠出しながら、昨今は日本生化学会の活動としてほとんど認知されていない。過去の会では生化学会の文字が全くみられないものもあった。金だけだしてやるから好きなように、という非常におおらかな時代のなごりなのだろうが、他の学会のシンポジウムへの力の入れようからするとややお粗末に感じるのは私だけだろうか？ “学術集会企画委員会を中心に、シンポジウムの位置づけ、年度ごとの分野の選定方法、会員に開かれた演題募集方法、会の名称など、早急かつ抜本的に見直すことが必要と思われる”と答申を出したが残念ながら改善された様子はない。やはりこのようなイベントに学会本部が力を入れていないこと会員には“生化学会は活発で魅力的だ”となかなか見えない。些末なことかもしれないが、“生化学会”の文字が大きく入ったポスターが大学の掲示板に貼られる機会が増えるだけでも学会の元気さを示すことになるだろう。

学会の元気度は実行部隊の本気度にかかっている。将来検討委員会も平成21年以降開かれていない。我々には危機感が不足しているのかもしれない。特に本年度は大会が福岡で分子生物学会の直後に同じ会場で行われる。実行委員会の方々からは悲壮な決意すら感じられる。それがバネとなって大会が成功することを祈らざるを得ない。

*慶應義塾大学医学部微生物学免疫学教室、本会評議員